

留 学 生 通 信

大学教育に組み込まれた 長期インターンシップ

Long-Term Internships as an Integrated Part of College Education



フリードル ケン・エルマー
Friedl Ken Elmar

■2008年シュトゥットガルト大学機械工学部修了

■主として行っている業務・研究

・パイロットの操縦に適應したヒューマンインターフェースの研究

■通学先

東京大学 大学院 工学系研究科 航空宇宙工学専攻 博士課程

(〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1)

E-mail: tt087283@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

1 はじめに

私の名前はケン・フリードル。私は2008年の夏にドイツのシュトゥットガルト大学の機械工学部（日本の大学では、大学院の修士課程に相当）を修了し、10月から東京大学工学系研究科の博士課程に籍をおいている。私はドイツで、ドイツ人の父親と日本人の母親のもとに生まれた。父は、ドイツのバイエルン州の州都のミュンヘンから北東に位置するデッゲンドルフの出身で、母は日本の四国の徳島県の出身である。私が育ったのは、北ドイツのブレーメンの近くである。私が大学生活を送ったのは、バーデン・ヴュルテンベルク州の州都のシュトゥットガルトであった。

2 ドイツについて

ドイツの面積は35万7021Km²で、37万7835Km²の面積を有する日本と比較すると少しだけ小さい。人口に目を向けてみると、日本の人口約1億2700万人の3分の2の約8200万人の人々がドイツに住んでいる。ドイツの国土は、どこでも人が住めるという点では、山がちで人が住みにくい地域が多い日本と比較して恵まれているかも知れない。ドイツ最大の都市は首都、ベルリンで340万人が住んでいる。2番目に大きい都市はハンブルク（約175万人）で、ミュンヘン（約129万人）、ケルン（約99万人）、フランクフルト・アム・マイン（約65万人）と続き、6番目に大きい街がシュトゥットガルト（約60万人）で、私が大学生活を送った、

シュトゥットガルト大学がある街である。

3 シュトゥットガルトについて

シュトゥットガルト（図1）を中心とする地域には14万社以上の企業があり、その中の約3万6千企業は、本社をこの街に構えている。この地方の重要な産業は、自動車製造業、機械製造業、電子工学、IT産業そしてマスコミや出版業までにも及ぶ。

ダイムラー社、ポルシェ社そしてボッシュ社の本社もこの街にある。そのほかにも多数の革新的な、とりわけ機械工学や電子工学関係の中規模な企業がシュトゥットガルト広域に集中している。

4 シュトゥットガルト大学について

私は大学時代のほとんどをシュトゥットガルト大学で過ごした。この大学の学生数は約2万人で、その中の約4500人が外国からの留学生である。彼らは主に、ヨーロッパ諸国、中華人民共和国（約1150人）、トルコ（約450人）、そしてロシア連邦（約160人）などから来ている。ちなみに2008年秋の学期に登録された日本からの留学生は14人であった。

5 大学での単位取得に必修のインターンシップ

私が今までに日本で過ごした期間は限られていて、まだドイツと日本の大学の違いを指摘できるほどではない。でもドイツの大学で機械工学を専攻するうえで、一つだけ日本のそれとかなり違っている所があるのに気づいたの



(a) 2008年にシュトゥットガルトで開催されたサッカーのヨーロッパ選手権の際の宮殿前の広場



(b) シュトゥットガルトのクリスマスマーケット

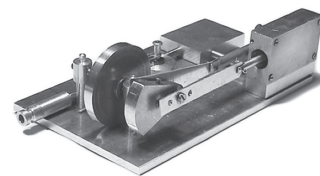


(c) シュトゥットガルトのショッピングストリートであるケーニグス通り



(d) シュトゥットガルトの宮殿前の広場にある噴水

図1 シュトゥットガルト



(a) 圧縮空気エンジン



(b) エアバス A380 のモデル

図2 インターンシップで製作したアルミの模型

で説明させていただく。それは、ドイツの大学では、実際の職場でのインターンシップを重視するという点である。

シュトゥットガルト大学機械工学部の単位の取得に必要な企業でのインターンシップの期間は、最低26週間である。まず高校を卒業して大学での籍を獲得する前に、6週間の基礎研究に重点をおいたインターンシップをすることを要求される。毎週、どのような作業を、何のためにするのかというレポートを作成して提出しなければならない。私の場合は、両親が住む北ドイツの地方都市にあるエアバスの工場での6週間のインターンシップをした。そこでの目的は、航空機製造に使う金属の張り方を見学、体験し勉強することであった(図2)。

その後の学生時代には、残りの20週間以上のインターンシップをした。私の友人たちは、この機会にと喜んで外国へも出かけて行った。私がシュトゥットガルトのアパートでルーム・シェアリングをしていた友達のヤーコブはフランスへ、そして別の友達のティーモはイギリスへ行った。他の友人たちは、南アフリカ、インド、アメリカ合衆国そしてシンガポールにある、主にドイツの企業の関連会社に行った。私の場合は、東京の六本木ヒルズの近くにあるドイツ系の車の会社

にお世話になった。その会社の販売、技術部門で約半年かかるプロジェクトに参加して働かせていただくことができ、その結果を修士論文にまとめることができた。このインターンシップの最大の利点は、その期間が半年以上という比較的長い期間に及んだということである。まず数週間かけて会社になじんだ後、あたかも普通の会社員のようにならざるに普段の仕事をし、かつ比較的重要なプロジェクトで働くことができた。

その他のインターンシップは、シュトゥットガルトのダイムラー社とシュトゥットガルト近郊の中規模の企業で行った。エアバスでのインターンシップ以外は、最低限の生活が保障される程度の報酬が支給された。

これらの企業でのインターンシップの経験は、就職活動の際に好意的に評価されるという利点以外にも、まだ学生である経験者が職業を仮体験できる唯一の機会を提供するという利点がある。六本木でのインターンシップのおかげで、私は博士課程でどのように研究を進めていくべきかという、はっきりとしたイメージを持つことができた。ここ東京大学で知り合った日本人の友人たちと話していて気づいたことは、彼らが大学卒業後にどんな職業について、どんな仕事をしたいのかははっきりとしたイメージを持っていないと

いうことである。私は、これは彼らが学生時代にした、インターンシップの期間があまりにも短すぎたこととも関係があるのではないかと思う。インターンシップのために与えられた期間が2、3週間では短すぎる。これでは幾つかの会社で働いて、いろいろな体験をすることは無理である。しかしながら、自分に合った仕事を見つけるためにも、さまざまな体験は不可欠である。私にとって、大学生活におけるインターンシップでの体験は、実際の職業への疑念と不安を取り除くために大変役に立った。

6 終わりに

私の考えでは、エンジニアの職業訓練として大切なことは、第一に理論の習得で、第二にそれらを研究生活において応用し、第三にインターンシップで職業への重要な一歩を踏み出してみることのように思う。そのためには大学と企業の連帯が必要である。企業もそれに理解を示して協力を惜しまない態度にすべきである。インターンシップをしている学生たちを、安い労働力とみなさないで、大切なプロジェクトなどに参加させるべきである。このようにしてはじめて双方とも利益を得ることができる。